
魔法先生ネギま！～時をとめる少女～外伝(仮)

アッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜時をとめる少女〜外伝（仮）

【Nコード】

N9322Z

【作者名】

アツシュ

【あらすじ】

まさかの外伝です。

この小説は基本的に本編である『魔法先生ネギま！〜時をとめる少女〜』を既読している方でないと理解出来ない可能性がありますので御注意下さい。

第一話（前書き）

第一話、投稿です。

第一話

これは限りなく拡散した様々な可能性を持つ世界での、一つの稀有な物語である。

必然と言われれば必然で。

偶然と言われれば偶然だった。

もしかすると“運命”だったのかもしれない。

兎にも角にも巻き込まれてしまった本人にとっては、迷惑以外の何物でもなかった訳だが、運命は非情にも廻り始めてしまったのだ。

事の発端は些細な出来事だった。

魔法の師匠でもあり無二の親友でもあるエヴァが、珍しい魔法具を入手したと自慢げに話してきたのだ。

日課である鍛練を始めようと、ダイオラマ魔法球の中に入ろうとした矢先の話だった。

元より俺は魔法具の知識も、魔法具に対する興味も一切持ち合わせ
ていなかった為、小さな胸を存分に張り、鼻息を荒くして魔法具の
説明を始めるエヴァを黙殺し、俺は再びダイオラマ魔法球の中に入
ろうとした。

しかし、痲癩を起こしたように喚き立て始めたエヴァに根負けし、
渋々説明を受ける事になったのだ。

エヴァ曰く、ダイオラマ魔法球に酷似したその魔法具は“実際に存
在する別世界の風景を投影する物”らしく、かなり希少価値が高い
らしい。

一度使用すると二度と使えなくなるそうで、一般人では手がつけら
れない程に価格が暴騰しているそうだ。

込められる魔力量によって映し出される別世界が変化するらしく、
込める魔力が多ければ多い程に珍しい別世界が映し出されるらしい。
そうして、俺に白羽の矢が立ったようでした。

「んで、俺に魔力を込めろってか」

半ば呆れながら俺はそう呟くと、エヴァは興奮冷めやらぬと言った
様子で何度も頷き、ボーリング玉ぐらいの大きさの魔法具を手渡し
てきた。

電気を与えなければ電球が目映い光を放たぬように、手渡された魔
法具は何も映し出しておらず、透明な硝子玉のように静かな輝きを
帯びている。

深々と溜め息をついてから、思いの外に軽いその魔法具を膝の上に置いて、壊さないように優しく両手を添える。

やるなら全力でやれ、とエヴァが囁し立ててくる為、俺は半ば躍起になって魔力を全力で込めてやった　　が、その魔法具は。

込められた魔力量に堪えられなかったとでも言うかのように。

パリンと小さな悲鳴を上げて、膝上で粉々に砕け散ってしまったのだ。

目の前の現状を脳が理解できないと叫んでいる間にも、嫌な静寂が部屋の中を包んでいく。

贗物だったのではと思いつつ、苦笑いしながら顔を上げてみれば
今にも泣き出しそうになっているエヴァの顔があった。

高かったんだぞと弱々しい声で呟き、その場で座り込んでしまったエヴァを見て焦燥した俺は、慌てて『クレイジー・D』で魔法具を直そうした。

もしかすると、今になって思えばこの行為が拙かったのかもしれない。

『クレイジー・D』の能力を込めた瞬間に、その魔法具は突如として目映い光を輝き始めたのだから。

膝の上から飛び散るように欠片が周囲に分散し、部屋の中に靄のような物が広がり始めると同時に、落ち込んでいたエヴァは即座に立

ち上がり。

「二度と使えないというのは、粉々に砕けて別世界を映し出すからだったのか！」

思わず「な、何だつてー!？」と叫びたくなるような言葉をエヴァは嬉々とした様子で口にして、今から起きる事象を楽しみにしているようだった。

俺が「能力使つて元に戻しちまった」と言うまでは。

エヴァがピタリと動きを止めて素っ頓狂な声を上げた次の瞬間には、何かを映し出そうとしていた筈の欠片達が、ゆっくりと俺の手元に集まってきた。

最初は夢か幻を見ている物と思っていた。

激昂したエヴァの声が耳に届かないぐらい、俺の思考は完全に機能停止していた。

何故なら、元の形へと修復されていく筈の魔法具が　俺の右手を飲み込むようにして修復されていくのだから。

「ち、ちよっ……エヴァ、ヤバいつて！」

俺が焦燥の声を上げている間にも魔法具は、手首、前腕、肘の順番で咀嚼するように飲み込んでいく。

反対の手で抵抗しようとするれば、まるで底無し沼に手を突っ込んでしまったかのように逆の手まで飲み込まれ始めてしまった。

様子がおかしい俺を見てエヴァもようやく気づいてくれたようで、何とかして助けしてくれるだろうと思いきや、胸の前で腕を組んで観察し始める始末。

「そういえば……取り扱い注意。手荒な事をするとは別世界に転移してしまう可能性有りって説明書に書いていたな」

何かを閃いたかのようにパンと手を打ち鳴らし、納得したようにエヴァは頻りに頷いている。

「おいおいおい……どうするんだよ」

「お前の死は……無駄にはしないさ」

徐々に飲み込まれていく俺を諦観したような瞳で見据え、エヴァは敬礼のポーズを取り始めた。

こんなふざけたやり取りをしている間にも、どんどん俺は魔法具に飲み込まれていく。

既に両腕は総て飲み込まれてしまっている、と言っても過言ではない状況まで陥ってしまっていた。

「おいッ！冗談じゃ済まねえぞコレ！」

「心配するな、私が何とかして助け出してやる……………出
来たらな」

「最後にボソツと何言って　んッ!？」

ついに胸の辺りまでできていた魔法具が口にまで侵食し、電源を切られたテレビのようにプツリと俺の意識は暗転した。

霧散していた意識が修繕されていく。

浮遊していた身体が修復されていく。

小さな呻き声を上げながら瞼を開いてみると、俺は教室のような場所です。車椅子に座らされていた。

誰も居ない教室に、存在するのは自身のみ。

教室の中は薄暗く、ぼやけた意識のまま黒板の上に掛けられた時計に目をやれば、時計は夜の七時を示している。

徐々に浮ついていた意識が覚醒し始める。

俺は即座に認識障害を自らに施し、神経を張り巡らして周囲を見渡し、見えたものの、どうやら何の変哲もない教室のようだった。

危険は無いらしい。

今の所は、だが。

そう理解した瞬間に強張っていた肩の力が抜け、無意識の内に安堵の吐息を吐いていた。

兎に角、誰かと連絡を取らなくては。

駄目元で制服のポケットを弄ると、何か固い物が手に触れた。

嬉々としながらソレを取り出してみたものの、何故か画面は真っ暗なままだった。

儂い希望を込めて電源ボタンを長押ししてみるが、反応はない。

どうやら連絡手段の頼みの綱である携帯は使用できないようで、舌打ちしながら役立つのソレをポケットに収め、今度はブレザーの内ポケットを弄った。

すると、そこにあったのは。

自らの姿が描かれた、仮契約カードがポケットに収まっていた。

自分でも驚く程の早さで召喚キーを唱えると、見慣れたソイツが膝の上に現れてくれた。

「命令シロオ！」

俺の顔を見上げ、命令を待つ髑髏の戦車。

誰よりも頼る事が出来る、俺の左手。

その不躰で不機嫌そうな声を聞いた瞬間、俺は思わず泣き出しそうになってしまった。

「シアー！良かった……お前が居なかったらどうしようかと」

「ドウデモイイカラ早く命令シロオ！」

異世界での再開を喜んでいる俺を完全に無視し、シアーは命令を寄せと促してくる。

感動の再会をぶち壊した相変わらずのシアーに苦笑しながら、俺はこの辺り周辺を探ってくるようにお望みの命令を与えてやった。

この時間なら門限は過ぎているだろうから、シアーが誰かに見つかる心配は無いだろう。

命令を得たシアーは膝上から飛び降りて、少し隙間の開いていた教室のドアから廊下へと出ていった。

教室の中に取り残された俺は改めて周囲を見渡していると、何処からか奇妙な音が聞こえてきた。

奇妙な音の根源を探ろうとした瞬間、冷たい風が頬を撫でていく。

どうやら奇妙な音の犯人は、隙間風が入り混んで生じていた物らしい。

かじかむ両手で車椅子を動かし、薄暗い空を映し出している窓に近

寄る。

この異世界の今現在の季節は、冬なのだろうか。

季節という事象が存在するかどうかも分からなかったが、そんな事を考えてしまつぐらいに肌寒かった。

はあ、と小さく吐息を吐いてみれば、白く息が残留してボンヤリと消えていく。

縁に手をやって立ち上がり、窓の外を眺めてみると瞳に映つた光景は。

見慣れた街並み ではなかった。

住宅街が広がっており、遠くには高々とそびえ立つようにビルが建っている。

麻帆良ではない何処かである、という事は即座に理解出来た。

上空は薄暗い雲が広がっており、雲に覆い隠されている為か月の姿は見当たらなかった。

今現在の居場所が何処か分からない。

この世界に麻帆良が存在するかも分からない。

改めて自分の置かれている現状に焦りを覚え始めた俺は、仮契約カードを額に当てて何度も念話を試みてみたのだが、応答は無かった。

範囲外に居るからなのか、それとも“元から通用しない場所に居るから”なのかも分からない。

得体の知れない恐怖が胸の中に蟠り始めた俺は、唯一と味方であると言えるシアアを連絡を取ろうとした　その時。

《主三》

全く抑揚が感じられない片言の声で、俺を呼ぶ友の声が頭の中に響き渡る。

何かあったのかと俺が問えば、兎に角来てくれと一言だけ呟いて念話は途切れてしまった。

シアアらしくない態度を怪訝に思いながらも、その場から俺は移動を開始した。

それ程に重要な事ではないのだろう、そう思いながら教室の外に出た。

その考えが　　甘かった。

これから繰り広げられていく過酷な運命の引き金になる事件が起きるとは知らずに、俺は廊下に出て周囲を見渡したのだがシアアの姿は見当たらなかった。

シアアと連絡を取ろうとした刹那。

「主三、コッチダ」

そう遠くない場所からシアアの声が聞こえてきた為、その声が聞こえた方に俺は歩を進める。

薄暗く肌寒い廊下を独りで突き進む。

暫く進むと、廊下の真ん中にポツンと止まっているシアアの姿が見えてきた。

「シアア、何かあった？」

よく目を凝らして見れば、シアアの後ろに何かが転がっていた。

月明かりもなく電灯も点いていない為、ハッキリとは見えなかったのだが。

廊下に蹲るようにして転がっている物体は、人のように見えた。

人のように見えた、ではない。

人だ、と本能が低い声で断言してくる。

すると、人なら良かったではないかと頭の中で理性が声を上げる。

今現在の居場所を聞く事も出来れば、ここに麻帆良が存在するかどうかかも確かめれるだろうと。

では、何故 俺の心臓は早鐘のような鼓動を繰り返しているのだろうか。

では、何故 薄暗く誰も居ない夜の廊下に人が蹲っているのだら

うか。

強張った腕を動かして、前へと歩を進める。

車椅子の軋む微かな金属音が、やけに耳に響き渡る。

「おいおい……何の冗談だよ、コレは」

無意識の内に頭を左右に振りながら、そう吐き捨ててしまう。

シアアの真後ろにある物体……廊下に蹲っている物体の周辺は赤く彩られていた。

次の瞬間、雲に隠されていた月が姿を現したのだろう。

まるで現実を直視しろとでも言うかのように、月明かりはソレを淡く照らし出した。

冷え切った廊下に倒れ伏し、背中に拳大の風穴を空け、その風穴から溢れ出す血で床を赤く染め上げているソレを。

本当の意味でソレが人であるという事実を茫然自失となっていた脳が理解した瞬間、次の行動は素早かった。

床に広がった血で制服が汚れる事も厭わずに車椅子から飛び降りた俺は、ソレの背中に両手を当てて『クレイジー・D』の能力を込めた。

どうか間に合ってくれと心底願いながら。

恐ろしい程に大きな風穴が塞がっていき、ソイツの破れた制服も修復していく。

着ている制服がスカートではない事から男だと判断したのだが、何故かいつも無意識に感じてしまう男性に対する嫌悪感は無かった。

修復は完璧に完了した。

後は運命にその身を委ねてもらおうしかないだろう。

はぁ、と溜め息をついてソイツから手を離し、額の汗を拭う。

汗を拭えた代わりに何か鉄臭い物が額に広がってしまったような気がしたが、敢えて考えない事にする。

確率は五分五分だろうと独りごちながら、傍にいたシアーに目をやる。

「シアー、早速で悪いんだが命令変更……“索敵”を開始しろ」

床に蹲ったままになっていたソイツはまだ温かく、虫の息ではあったが心臓を貫かれているにも係わらず呼吸をしていた。

という事はソイツを刺し殺そうとした犯人が、まだ近くに潜んでいる可能性が高い。

正直に言えば、この場に留まっておく事は得策では無い為、ソイツを見捨てた方が良いと理性が騒ぎ立てている。

確実に心臓を狙った刺突。

ソイツに目立つた外傷は無く、周囲に争った形跡も無い。

絶対なる殺意を込めて、心臓を抉る為に放たれた一撃。

手練れでなければ不可能だと思われる必殺の一撃を放った犯人が、まだこの近くに居るかもしれないのだ。

エヴァとの模擬戦で嫌という程に理解しているのだが、基本的に俺は近接戦には滅法弱い。

出来れば近接戦闘は避けるというのが、俺の頭には常に有る訳で。

恐らく風穴の大きさから見て槍のような得物で貫かれたのだから、犯人は近接戦を得意とする人物なのだろう。

突如として襲われたら、正直どうなるか分からない。

俺の命令を聞いて通常通り二つ返事で了解したシアーは、キャタピラの回転音を廊下に響かせながら廊下を爆走していった。

もう少し静かに索敵しろよ、と思った時だった。

床に倒れ伏したままだったソイツが、小さな声を上げたのは。

「あ……………つ」

目の前のソイツが弱々しい呻き声を上げたのを耳にした俺は、即座に近寄って仰向けにしてやった。

そして、赤錆色の髪が生えた頭を優しく持ち上げて膝上に乗せてやる。

するとソイツは顔を顰めて、瞳を閉じたまま風穴が空いていた辺りを手でまさぐり始めた。

これだけ動いているのなら、もう死んでしまう可能性は無いだろう。異世界に飛ばされて、数分もしない内に人の死と直面するなんて勘弁してもらいたかった。

助かるかどうかは五分五分だったので無意識の内に安堵の溜め息を吐いていた俺は、一応鼓動を確かめる為にまさぐっているソイツの手を横に退けて、左胸に手を置いたのだが。

胸に置いた手が、カチリと硬直する。

素直に俺は、声を上げる事もなく驚いた。

挟まれた筈の心臓は確かに、規則正しい鼓動を繰り返している。

だが、その事で驚いたのではない。

鼓動を確かめる目的で置いた筈の手に
ふわりと柔らかい感
触を感じたのだ。

平らに見えた胸板は、よく見れば若干の膨らみがあるように見えた。

その瞬間、停止していた脳が総てを理解した。

まさかコイツ“女”なのか、と。

この世界にも俺のような人間は居るのだなと、安心に良く似た奇妙な感情を感じていた時。

「何が　　起きた？」

「それはこっちが聞きたいな」

目の前のソイツが力無い声で呟いたので、俺は即座に訊ね返してやった。

すると俺の声に驚いたのかソイツはカツと双眸を見開いて、虚ろな瞳でボンヤリと俺を見つめている。

暫し見つめ合っていたのだが、不意にソイツ大きな嚏をした為、盛大に俺の顔に唾が飛び散る事になった。

まだソイツは意識がハッキリしていないようで、俺の顔に大きな嚏をお見舞いしたにも係わらず、瞳を閉じて鼻を嚙っている。

どうやら冷たい廊下に倒れ伏し全身から血が抜けている為か、身体が冷え切ってしまったようでソイツの肩は細かに震えていた。

若干の苛立ちを感じながらも顔に飛び散った唾を拭い、俺はブレザ―を脱いでソイツの胸の上から掛けてやる。

「アンタ……名前は？」

不躰な行動をお見舞いしてくれた人間を膝枕しているのは腹立たしかったが、取り敢えず名前を聞いてみるとソイツは再び瞳を見開い

て、徐に不思議な名前を名乗った。

不思議だと感じたのは単純明解な理由だった。

女の善なのに“エミヤシロウ”と、男の名前を名乗ったのだから。

第二話（前書き）

第二話、投稿です。

第二話

本来なら有り得ない邂逅かいこうを果たした二人に待ち受けている物とは苛酷なる運命か……それとも。

性別が女なのか男なのか判断に苦しむその人物は掠れた声で自らの名を名乗った後、弱々しく呻きながら身体を起こした。

起き上がった後もエミヤは顔を苦痛に歪ませたままで、口からは苦悶の声を漏らす。

全身のそこかしこに痛みが残っているのであれば、冷え切った廊下の空気は骨身に沁みるだろう。

額に手を添えて激しくかぶりを振り、赤銅色の短髪を揺らしているエミヤに「まだ動くな」と優しく声を掛けたのだが、残念ながら俺の声は届かなかったようだ。

「……はぁ……はぁ……ぐ……ッ」

幽鬼の如くゆらりと立ち上がったエミヤは何の前触れもなく、覚束ない足取りで直ぐ傍の教室へ向かって歩き始めてしまった。

一步、また一步と満身創痍状態である筈の身体を引きずるようになり、エミヤは前へと進んでいく。

そんな突拍子もないエミヤの行動を見て俺は一瞬言葉を失ってしまったが、黙ってその愚行を見逃せる訳がなかった。

先刻まで血反吐を無惨に撒き散らし、凍えるような寒さの廊下で倒れ伏していたのだから直ぐに動いて良い筈がない。

たまたま俺が居合わせなければ冷たい廊下で人知れず死んでいく筈の運命だった人間に、ちょこまかと動き回られても困る。

「止まれッ、何処へ行くつもりだ!？」

先程よりも遥かに語気を強めて呼び掛けると、振り向いたエミヤの口から耳を疑うような返事が返ってきた。

廊下の床に拡がった赤黒い染みを小刻みに震える手で指差して、如何にも私は無理をしていますと感ぜさせる引き攣った作り笑いを浮かべながら。

「汚してしまったのだから片づけないとダメだろ」

と、蚊の鳴くような声で言ってきたのだ。

脳が言葉の意味を咀嚼する事が出来ず返答に窮してしまふ。

その代わりと言っては何だが、頭の上に疑問符だけが大量生産されていく。

呆気を取られてしまった俺は目の前の人物を、ただ茫然と見上げる事しか出来なかった。

嫌な空気が場を支配していくが、この空気を生産した当の本人は気づいていないのか、首を斜めにしてキョトンとした面持ちのまま此方をジツと見ている。

一刻前まで死に掛けていたというのに、コイツは何を言っているのだろうか？

「……分かったから、そこに座っている」

今にも昏倒してしまいそうな程に真っ青な顔で笑みを造り続けるエミヤに声を掛け、俺は嘆息しながら両手を血の拡がった床についた。

その瞬間、ぬめりとした薄気味悪い感触が両手に纏わり付くが、敢えて意識せずにそのまま立ち上がった。

胸に風穴をポツカリと空けていた要救助者を治療したのだから、当然だと言われれば当然なのだが。

俺の両手や制服はエミヤの血で真っ赤に汚れており、非常にグロテスクな状態になっている。

百歩譲って制服が汚れてしまうのは仕方なかったとしても、こんな血で汚れた状態のまま車椅子に腰を下ろしたくは無いです。

しかし、今は緊急事態である為やむを得なかった。

傍にある車椅子に嫌々ながらも腰を下ろした俺は、未だに怪訝そうな面持ちのまま此方を見ているエミヤに目をやった。

黄土色の制服に点々と赤い染みを作った口許には血を吐いた跡がある人間と、返り血を浴びたように制服を赤に染めて車椅子にグツタリと座っている人間。

端から見れば、二人とも大怪我を負っているように見えるかもしれない。

そんな馬鹿げた事を考えながら俺は立っているのも儘ならないような様子のエミヤに近寄り、地面に座って待っているように言い聞かせた。

まだ、錯乱しているのだろう。

キョトンとした表情を浮かべて何も言わずに小さく頷き、その場で腰を下ろしたエミヤを残して直ぐ近くの薄暗い教室の中へと入る。

薄暗い教室の中を進み、隅の方に設置されていたロッカーの中から乾いた雑巾を何枚か拝借し、早々とエミヤが待つ廊下へと戻る。

キッチンと正座して待機していたエミヤの前を無言で通り過ぎ、俺は廊下に拡がった赤色まで歩を進め、車椅子から降りて雑巾で血を拭き取っていると。

「て、手伝
」

四つん這いで恐る恐る近寄ってきたエミヤに動くなと厳しく命令して元居た場所まで戻らせ、暫くして漸く床を綺麗にし終えた俺はコ

イツを始末する事に決めた。

痕跡を残しておく訳にはいかない。

言わずもがなだが、雑巾を。

爆発及び爆風の威力は最小限にし、赤黒く染まった雑巾達を次々に始末する。

無論、エミヤには見える事がないよう教室の中に入ってからである。雑巾の始末を終えて再び廊下に戻ると、どうやらエミヤの体力も少しずつ回復してきたようで、先程までより顔色は良くなってきているように見えた。

カチコチに固まって正座しているエミヤを視界の端に留めておきながら、これからどうしようかと思考を巡らせていたのだが。

恐々しながら俺の様子を窺っているだけだった筈のエミヤが、そう言えばと口火を切ったのは、その時だった。

「名前……まだ聞いてなかったよな？」

後頭部の辺りに片手を添えたエミヤは、はにかんだような笑みを浮かべて名前を訊ねてくる。

名前　　か。

とある理由があつて思わず答えるのを躊躇っていた俺を怪訝に思つたのか、エミヤは首を傾げて頬の辺りを指で搔いている。

名前を誰かに知られてしまうという事は、その世界での自らの存在を固定してしまう事になる。

あまり長居はしたくないというのが本音で、今すぐにも元の世界に戻りたい。

故に目の前の人物に名乗る必要ないし、本来なら面倒事を避ける為に助けるべきではなかったかもしれない。

どんな世界かも分からない所に飛ばされて孤立無援状態に陥っているのだから、最低でも偽名を使用するぐらいに用心深く行動しても損は無い筈なのだが。

何故か 目の前で屈託のない苦笑いを浮かべているエミヤだけは信頼できるかもしれない。

普通の人を持ち合わせていない“何か”を持っている、そんな気がした。

「……コノエ、だ」

ぼつりと小さな声で無愛想に名字だけを呟くと、エミヤは一瞬だけ不思議そうな面持ちになり再び質問を重ねてきた。

「コノエ……って、近衛兵の近衛でいいのか？」

発言する事なく首を縦に振るだけで肯定の意を伝えると、何故かエミヤは表情を僅かに輝かせたように見えた。

「俺のエミヤって名字も近衛の衛にさ、宮崎とかの宮なんだ」

そう言つて衛宮は微笑を浮かべていたのだが、ふとした拍子に真顔に戻つて突然頭を下げて礼を述べてきた。

助けてくれてありがとう、と。

言葉の締め括りに「どうやって助けてくれたのかは聞かないでおくから」と衛宮が意味深な事を言つていたような気がしたのだが、俺は此処で何があつたのかを訊ねる事にした。

人気のない夜の校舎で胸に風穴を空けられていたのだ、ただ事ではないだろう。

厄介事の臭いがプンプンするが此処で会つたのも何かの縁なのだから、最後まで付き合つてやる事にしよう。

すると衛宮は頭を上げて、俺の瞳だけを真つ直ぐ見詰め。

「何かよく分からないモノがいたんだ」

自分でも上手く理解出来ていないといった様子でポツリと呟き、これまで経緯を話し始めた。

たまたま通り掛かった校庭で赤い男と青い男が、本当の意味で殺し合いをしていたらしい。

そして衛宮は本能で嫌な予感がして逃げ出したのだが、気づかない内に人気のない校舎に逃げ込んでしまつていて、失策だったと思つた次の瞬間には赤い槍を持った青い男が目の前に立つていて。

躊躇なく心臓を一突きされたんだと苦々しく最後に呟いて、衛宮の話は終わった。

今になって殺されかけたという事実を脳が理解し始めたのか、衛宮はガツクリと頂垂れて身震いしている。

「……………冗談みたいだろ？」

暫くして自嘲するように苦笑いを浮かべながら顔を上げた衛宮に、俺はかぶりを振ってから「信じる」と答えてやった。

まさか信じてくれるとは思っていなかったのか、衛宮は鳩が豆鉄砲を喰らったような面持ちで硬直しているのを余所に、俺は若干焦っていた。

衛宮が何かを話しているが完全に無視し、俺は周囲を見渡して神経を細く細く尖らせる。

何故なら、普通の人が耳にすれば一笑に伏してしまうような衛宮の話を裏打ちするように、先程から気配がするのだ。

それも恐らく、二人組。

一人は認識障害等を使用せず気配を隠蔽していないようだが、もう一人は巧妙に気配を消しているようで、恐らく何処かに居るだろうという事ぐらいしか感じる事が出来ない。

しかし、だからこそ　その人物が手練れであるという事が理解できる。

その人物とは対等 ではないだろう。

一瞬の隙を突ければ勝機が有るかもしれないぐらいの格上だと判断した俺は、再び気配探知を試みると 恐らく下の階に二人は居る事が判明した。

片割れの気配を容易に探知出来るのが不幸中の幸이었다。

更に廊下で倒れ伏していた衛宮にも咄嗟に認識障害を施したのが功を奏したのか、その二人は虱潰しに何かを探しているようだ。

このまま此処に留まっていれば、その二人組と鉢合わせする可能性が高い。

こんな時間に一般人が校内を彷徨っている筈がなく、何かの追っ手なのか衛宮の死体を確認しに来たか。

どちらにせよ、俺達が会ってはいけない人物達である事は誰でも理解出来るだろう。

直ぐにでも移動したい所なのだが、鈍足の俺にとって頼みの綱である転移魔法は 今は使えない。

衛宮には適当に説明するとしても、此処の土地勘を把握していないので“かべのなかにいる”状態になって二人ともお陀仏になる可能性が非常に高いのだ。

例え運よく何処か違う場所に辿り着いたとしても転移魔法を発動する際に生じる魔力の残滓を逆探知ざんしされ、せつかく施した認識障害の

意味が無くなる可能性も有る。

兎に角、気付かれない内に此処から離脱しようと腹を括り、何故かシヨンボリと沈んでいる衛宮に話し掛けようとした刹那。

《見ツケタゼエ》

偵察に出していたシアーから突拍子もなく連絡が入ったので、俺は思わず口に出して返事しそうになったが。

「……………」

目の前で小首を傾げて此方を見ている衛宮の存在を思い出し、発言する事なくシアーに脳内で返事を返す。

《人数は？》

《赤イ男ト赤イ女ノ背後ヲ取ツタ。マダ俺ニ気付イテイ 始末スルカ？》

抑揚の無い片言言葉で物騒な提案をしてきたシアーに二人を尾行するように命令し、俺は素早く思考を張り巡らせた。

赤い男は衛宮の話に出てきた人物で間違いないだろうが、赤い女は誰だ？

衛宮の話に赤い女なんてのは登場してこなかった。

もう一人は青い男では…………いや、殺し合いをしていたのだから並んで歩いている筈が。

《主三》

幾重にも張り巡らした思考の糸を断絶するかのように、シアーが俺を呼んできた。

《モウ直グ二人ガ階段ニ辿リ着ク。恐ラク主ノ居ル上ノ階ニ向カウト思ウゼエ》

迷っている時間はない、とシアーは言いたいのだろう。

出来れば色々な諸事情により交戦は避けたいというのが今の心情だが、そんな悠長な事も言っていられない切羽詰まった状況なのは確かだ。

目の前には相変わらず小動物のように小首を傾げ、疑問符を浮かべ続けている衛宮が居る。

……せつかく助けたのに再び死んでもらっても困るな。

「衛宮……少しだけ何も言わずに待っていてくれないか？」

「あ、ああ……でもどうして」

突然意味の分からない提案をしてきた俺を疑問に思ったのか、衛宮は理由を訊ねようとしてきたが、怒気と殺気を込めて容赦なく睨み付けてやり、口を閉ざさせる事に成功した。

すくすくこと萎縮してしまった衛宮を見て、ちゃんと後で謝ろうと思いなから俺は額に手を添え、両の瞼を閉じ。

「同調、開始」

自らの意識を身体から、また別の場所へと移動させた。

再び開けた双眸に映った光景は、先程までの物とほぼ変わらない物だった。

人っ子一人も居ない薄暗い廊下。

電気の点いていない寒々とした教室。
窓から瞳に映る物は、月を覆い隠すように拡がった黒い雲。

唯一、前方に奇妙な二人組が歩いているという一点を除けばの話だが。

《状況は？》

《マダ気付カレテネエナ》

キヤタピラの駆動音を廊下に一切響かせる事なく、しっかりと一定の距離を保ってシアーは前方の二人組の尾行を続けていた。

前方には銀の短髪で赤い外套を羽織った男と、赤いタートルネックを着て黒いスカートを履いた長髪の恐らく少女と思われる人物が並んで歩いている。

どうやら残されている時間は少ないようで、二人組の前方には上の階へと続いているであろう階段が僅かに見えている。

あの二人組は十中八九、敵であると判断して構わない筈だ。

無駄な交戦は避けたいが名前、顔、年齢、何でも良いから何かしらの情報は得たい。

《シアー、命令変更……俺が発言した言葉を復唱せよ》

此方から訊ねなくとも向こうから勝手に話してくれる可能性も有るのだから、一先ず探りを入れてみる事にする。

「了解」と短い言葉で俺の命令を聞き入れたシアーに、早速だが俺の言葉を代弁してもらおう事にした。

「オイ、ソコノ二人」

二人組の足音しか響いていなかった廊下にシアーの不気味な声が響き渡ったその瞬間、此方に背を向けて歩いていた二人組の取った行動は正に一瞬だった。

少女は身を翻すように振り返りながら後ろに飛び退いてから身を屈めて体勢を低くし、男は女の遮蔽物になるように素早く移動して何処から出したのかは分からないが奇妙な双剣を油断なく構える。

その場に窒息してしまうかと思える程の張り詰めた空気が支配した
かのように当初は思えたのだが。

「……………何よアレ？」

一切の隙を見せず、双剣を構えている男の肩先からヒョッコリと顔を出した女が呟いた一言により、張り詰めていた空気は一気に弛緩していった。

「マスター……………危険だから下がっている」

そんな恐れを知らぬ少女を首だけを若干横に向けて諫めるように睨み付け、再び男は少女の盾になるように双剣を構えたまま移動する。

しかし、身を案じての男の忠言を少女が聞き入れる事はなく。

「大丈夫よ、魔力も何も感じないじゃない」

そう言いながらシアーを見据えて鼻で笑い、緊張して損をしたと言わんばかりに溜め息を吐きながら少女は男の横に並び立った。

「さっき戦闘したランサーのマスターの使い魔かしら……………ねえどう思う、アーチャー？」

少女は口許に手を添えて考え込む素振りを見せた後、意見を求めるようにして横に立つアーチャーと呼ばれた男の顔を見上げる。

アーチャーと呼ばれているくせに男が双剣を構えているのは理解し難かったが、俺は黙って成り行きを見守る事にした。

すると男は双剣の構えを解いて此方から見ても大袈裟に見える程に、ガツクリと肩を落として吐息を吐き出した。

横に立つて意見を求めてきた少女に対して、呆れ返ってしまったと言外に伝えるかのよう。

そんな突然の男の行動に納得がいかなかったのか、少女は瞳を三角にして仏頂面を浮かべている男の顔をキッと睨みつけている。

「……マスターは今二つミスを犯した。一つは私達がランサーと戦闘したという事を何かも分からぬ相手に発言した事。もう一つは私のクラス名をアーチャーだとバラした事だ」

心底うんざりしたように呟いてかぶりを振るアーチャーに対し、少女はポカンと開けた口を隠すように手を当て、瞳を真ん丸にして硬直している。

「……わ、悪かったわね」

自らの失言に気付いた少女は顔を歪めながら謝罪の言葉を述べたが、対するアーチャーはやれやれといった様子で肩を竦めて吐息を吐いた。

「オイ……モウイイカ？」

端から見ていると何やら凸凹カップルがイチャついているようにも見える光景に嫌気が差した俺は、二人の意識が此方に向くようにシアーに口を動かせる。

すると緩んでいた空気が一瞬で張り詰め、二人は真顔に戻って突き

刺さるような敵意の視線を此方にぶつけてくる。

「アンタラノ目的ハ？」

「答える義務は無い」

俺の質問を完全に拒絶するかのようにピシヤリと断言し、アーチャーは再び双剣を構え直して戦闘体勢を取る。

「ソコノ“マスター”トハイチャイチャシテモ俺ノ質問ニ答エル余裕ハ無イツテカ」

マスターという単語にどういった意味が含まれているのかは分からないが、恐らくあの二人が主従関係である事は間違いないだろう。

何故、少女の方が主なのかは全く見当もつかないが、何かしらの魔力の糸が二人の間に繋がっているように見える。

何かしらの利害が一致しているから行動を共にしている、といった所か。

俺の挑発的な言葉に対して主である筈の少女は顔を紅潮させて否定的な言葉を喚き散らしているが、アーチャーの方は顔を一つも変える事なくジツと此方を見据えている。

少しでもおかしな動きを見せれば両断する、と言わんばかりに。

「図星ダツタカ？……案外才似合イカップルダト思ウゼ？赤色トイウ共通点ダケダガ」

その瞬間、探りを入れる為にあくまでも挑発的な態度を取り続けた俺に返ってきた物は。

「……囀るな」

紛れも無い、一本の弓矢だった。

まるで元から手元に存在したかのように一瞬で洋弓を取り出したアーチャーが高速で放った矢は、俺に時を止める隙も与えずにシアアの身体に容赦なく突き刺さった。

ように思えたが、そこはシアアの耐久性が優ったのか矢を真横に弾き飛ばし、反動で若干だが後退するという結果に終わった。

「……危ナイナ、何シヤガル」

アーチャーという名に恥じめ卓越した技術に対して、これが生身だったらと内心でダラダラ冷や汗をかきながら俺は声色を変えずに冷静を装った。

幸か不幸か意識はせずともシアアの声に、感情は一切籠らないのだが。

「……嘘？」

ただの木偶でんごにしか過ぎないと思っていた筈の少女の驚きは、それはもう計り知れない物だったのだろう。

超人的な速さで射られたアーチャーの矢を受けて無傷とは信じられないといった様子で少女は此方を見詰め、言葉を失って呆然と立ち

尽くしている。

驚いたのは従者であるアーチャーも同じだったようで、残心の構えを解かずに硬直していた。

もしかすると、アーチャーの方が少女よりも驚いていたかもしれない。

一撃必殺の意を込めて放った渾身の矢が、敵に傷一つ付ける事が出来なかったのだから。

「……馬鹿な」

端正な顔付きを焦りで若干歪ませながら、アーチャーはマジックのように弓を何処かに仕舞い込み、再び何処からともなく双剣を取り出して胸の前で交差させるように構えを取る。

アーティファクトのように即座に出し入れが可能な武具なのかもしれない、と俺は考えながらもそろそろ潮時だろうと感じていた。

相手の名前と顔と戦闘スタイルを無傷で、尚且つ此方の姿を見られる事なく知れたのだ、後は

「交渉決裂ツテカ？仕方ナイナ」

この時、正体不明なシアーの存在は目前に立つ二人にとって、脅威以外の何物でもなかった筈で、その上シアーの本質を知れば更に恐れ戦く事間違いないだろう。

《シアー、命令変更。前方の二人を足止めしろ》

《了解シタア》

脳内で響くシアアの返事を聞ききながら俺は同調を中断し、急いで
双眸を開けると。

「やっと起きたのか……心配したぞ」

まるで忠犬のように直ぐ傍に座り込み、俺の様子を窺っている衛宮
が目の前にいた。

良く待っていたと褒めてやりたい所だが、ノンビリと話し込んでい
る暇は一切無い。

衛宮には悪いが今は何処か安全な場所まで早く逃げなくてはならな
かった。

「移動するからついて来てくれ」

そう言つて即座に移動しようとした刹那。

耳朵を激しく叩き揺らす爆音が。

鼓膜を破ってしまうのではないかと思える程の爆音が階下から鳴り
響いた。

地震が起きたかのように地面が軽く揺れ、天井からはパラパラと細
かい建物の破片が降ってくる。

「な、何だッ!？」

衛宮が驚くのも無理はない、静寂に包まれていた校舎の中で突如として爆音が鳴り響いたのだから。

その場で衛宮はあたふたと首を左右に動かして怯えるように辺りを窺っていたのだが、そんな慌てふためく衛宮を置いていくようにして俺は何も言わずに移動を開始した。

「お、おいッ……何処へ行くんだよ!？」

必然的にその場に残されてしまった衛宮は慌てて後を追いかけてくる。

残念だが衛宮に説明している暇は無い。

あの二人の実力が不明なのだから、シアーがどれだけ持つかも分からない。

本当の所を言えば俺の左手が、だが。

衛宮も危機的状況を本能で理解出来てきたのか最初は説明を求めるように喚いていたが、暫くすると何も言わずについてくるようになった。

長い廊下を進み続けている間にも、再び爆音が鳴り響いて地面を揺らす。

まさか校舎を倒壊させる事はないよなと違う方面での焦りを感じながらも移動を続け、漸く階段まで到着した俺は車椅子から立ち上がった。

足を一步前に踏み出せば下りる階段がある位置で立ち止まった俺は、後ろに立っていた衛宮の方を振り向いた。

「衛宮、俺は足が悪くてな……階段を下りるのに凄く時間が掛かるんだ」

肩で息をしながら俺を怪訝な表情で見詰めている衛宮に語りかける。車椅子で悠長に階段を下りている時間は無いし、車椅子で下りるくらいなら自らの足で踏破した方が早いだろう。

「黙って静かに車椅子を下まで運んでくれ……頼む」

「あ……ああ、分かった」

何か言いたそうな表情を浮かべていたが、衛宮は首を小さく縦に振ってくれた。

声を出せば二人組に気付かれる可能性が有る為、隠密に行動しなくてはならない。

命令を受けたシアーがどのように命令を完遂しようとしているのかは分からないが、二人を足止めするのは容易ではないだろう。

此方の存在に気付かれてしまい、もしバラバラに行動されてしまえば事態は非常に拙い事になる。

緊迫した面持ちで息を整えようとしている衛宮に背を向け、俺は両手で手摺りを掴んで足を一步だけ前へと踏み出した。

その瞬間。

ぐにゃぐにゃと視界が歪み、ぐるぐると回転を始める。

突然の身体の異常に神経がついていけなくなり、全身に力が入らなくなる。

階段を踏み外した片足は居場所を求め、前へ前へと倒れていく。

ついに手摺りを掴む事さえ出来ぬようになり、ふわりと浮遊感を得た身体は前のめりになって傾き　そして。

「え……近衛？どうし

」

衛宮の心配げな声を後ろに置き去りにして、俺は為す術も無く踊り場へと向かって真つ逆さまに落ちていった。

浮遊感を手に入れた筈の身体は直ぐに重力に押し潰されてしまい、抵抗する事も出来ぬまま強かに全身を階段に打ち付ける羽目になった。

目の前に星が散らばり、遅れて激痛が全身に襲い掛かってくる。

そのまま倒れ込んだ勢いが止まる事はなく、全身を激しく階段に打ち付けながら俺は漸く踊り場で止まる事が出来た。

身体を庇う事は不可能だったが、何とか転げ落ちる前に身体強化を施す事が出来た為、軽傷で済んでいる……筈で。

「あ……いた……い」

視界がグルグルと回転し続けて身体が痛覚を刺激して危険信号を発しているが、遠くからまだ激しい爆音が聞こえてくる為、こんな所で止まっていられる余裕もない。

ズキズキと痛む全身を庇いながら再び立ち上がろうと力を込めた時。

「近衛ッ！」

校舎全体に響き渡るような大声で叫んだ後、物凄い勢いで階段を駆け降りて衛宮が近寄ってくる。

《……主ヨ、今ノ声デ二人組ニ気付カレタジヤネエ〜カ!》

次の瞬間には頭痛のする頭の中にシアーからの凶報が飛び込んだ。た。

「大丈夫かッ!？」

俺は焦点が定まらずに駆け寄ってきた衛宮の小さな顔をぼんやりと眺める事しか出来なかった。

「ばか……早く、車椅子を……」

「何バカな事言ってるんだッ!」

置き去りになっている車椅子を持ってくるように促したのだが、鬼気迫る表情で衛宮に怒鳴り付けられてしまった。

《主ヨ、命令ヲ変更シテクレッ!二人ヲ抑エ切レナネエ〜ッ!》

シアアの念話が脳内に響き渡る。

いつも単調な筈のシアアの声が珍しく上擦っているの、それ程に追い詰められているという事なのだろう。

《女ガ主ノ居ル方向ニ向カオウトシテルツ！》

頭痛と耳鳴りを誘発させるような激しい音量でシアアの声が此方に届く。

原因不明の異常で身動きが取れなくなり、傍には足手まといが一人形振り構っていられない所まで来てしまったようで、非情な決断を下さざるを得なかった。

《命令変更……シアア、少女だけを狙え》

少女だけを狙ってしまえば確実に足止めにはなるだろう。

どういった形で終わりが来るかは、予想がつかないが。

「了解」とシアアの短い言葉が頭の中に届いた次の瞬間に、直ぐ近くで爆音が鳴り響いた。

もう直ぐの所まで二人組が来ているようで、もう止まっていられない。

「衛宮……俺を下まで、運んでくれ……」

「何を言っ
て」

「いいから早くしろッ！二人とも死ぬ羽目になってもいいのか!？」

反駁しようとした衛宮の言葉を遮り、精一杯の力を振り絞って喉から声を出した。

その時、再び近くで爆音が鳴り響いた。

一回目の攻撃でシアーが目標を仕留め切れなかったのだろう。

巻き起こった爆風が此方まで届いたのか、俺を泣きそうな瞳で見下ろしている衛宮の髪を僅かに靡かせた。

「わ……分かった……じつとしてくれ」

ようやく状況を理解してくれたようで、衛宮は苦虫を噛み潰したような顔になりながらも承諾してくれた。

ふわりと身体が宙に浮く感覚。

衛宮に抱き抱えられた俺はそのまま階下まで運ばれ。

「待ってる、直ぐに戻って来るから!」

辿り着いた一階の廊下で横に寝かされて、ただ俺は再び階段を駆け上がっていく衛宮を見送る事しか出来なかった。

車椅子なんて置いて逃げればいい、と言ってきて衛宮を無理矢理納得させて俺が取りに行かせたのだ。

理由は色々あるが、兎に角アレを失う訳には行かなかった。

階段を駆け登る衛宮の姿が見えなくなった後、何とか臨戦態勢だけは取っておこうとするが腕に力が籠らずに再び床に倒れ伏してしまっ

た。
か先程から視界が霞み、頭痛と吐き気が止まらない。

おかしい、やはり何かがおかしい。

幾ら階段から転げ落ちたとはいえ、身体強化を施していた自分の身体がここまでヤワだとは思えない。

だとすれば、考えられる可能性は。

《シアー……お前……何か、魔法、喰らってないか？》

残った気力を振り絞って未だ戦闘中のシアーに念話を送る。

すると。

《女ノ方カラ何発力喰ラツタガ、痛クモ痒クモネエ〜ゼ？》

お前はな、と思わず突っ込みたくなる衝動を抑え込んだ俺は、溜め息を吐きながら念話を中断しようとしたのだが、溜め息を吐いた途端に胃の中にあつた物が逆流して思い切り口から吐き出してしまった。

恐らく呪いのような魔法をシアーは喰らっているのだろうが単一の命令しか聞けない以上、命令を変更する事も追加する事も出来ない。

「ゲホツ……ゲホツ……ゴホツ……」

酷い顔になっているのだろうなと苦笑いを浮かべ、ぼんやりと何も無い天井を見上げる。

喉の焼けるような痛みには耐えながら、仰向けになって衛宮の帰りを待つ事しか俺には出来なかった。

暫くして、漸く車椅子を抱えた衛宮が階段を急ぎ足で駆け降りてきた。

だが、俺の様子がおかしい事に気づいたのか最後の数段を飛び降りるようにして地面に着地し、此方に早足で駆け寄ってきた。

「近衛、吐いたのか！？やっぱり動かしたらマズかったかッ？……今直ぐ救急車を」

車椅子を床に置いて顔の直ぐ傍で片膝を着き、携帯を取り出した衛宮の右腕を掴んだ俺は首を左右に振ってみせた。

頭を強打して昏倒している人間を動かすのは非常に危険である。

動かさず即座に救急車を呼ぼうとした衛宮の行動は本来なら褒めたえるべきなのだが、多分だが俺は頭を打って吐いた訳ではないし此処に留まっていればいる程、胃酸を逆流させる羽目になる。

「いいから……ここから早く……安全な場所へ……」

最後の気力を振り絞って衛宮の腕を握り締め、早く移動するように促す。

その時、再び上の階で爆音が鳴り響いた。

未だに鳴り響く爆音が決断する決め手となったのか、衛宮は無言で頷くと俺を優しく持ち上げて車椅子に座らせ、出来る限りの早さで車椅子を押し始めた。

「病院は……開いてないな。救急は遠いしな……近衛、一先ず俺の家に行こう」

車椅子を押しながら何とか校舎から出る事に成功し、グラウンドを急ぎ足で進んでいく衛宮が背後から声を掛けてくる。

先程から抵抗レジストはしているが、段々と呪いが蓄積されているようで俺は意識が途絶えかけていた。

高熱でうなされているような状態まで追いやられていて、恐らく死に至る事は無いと思うが、本当の所は分からない。

「……近衛、大丈夫かッ!？」

景色が目まぐるしい速さで動いていく。

どうやら今は校門を抜けたようで、長い長い坂を下り始めたようだった。

「……!……ッ!？」

もつそろそろ良い頃合いだろう。

「…………アベアット」

ぽつりと呟いた瞬間、手元に“左手”が返ってきたのを見て安心したのか、そこで俺の意識は断絶してしまった。

第三話（前書き）

まさかの流れで第三話です。

本編はどうしたという冷静かつ的確なツッコミはお控え下さい。

プロットが……プロットが出来上がったんりゃ

今回、少しお知らせが有りますので後書きまで見て頂けると嬉しいです。

では、第三話 どうぞ。

第三話

「……………ん」

最初に零れ出たのは譫言^{しつわんごん}で。

拡散して曖昧になっていた神経の一本一本が次第に確立していき、五感を全身が取り戻しつつあった。

最初に取り戻したのは、触覚。

がたがたと震える振動を受けて、僅かに身体が揺れ動くのを感じる。

子牛が荷馬車に乗せられて市場まで出荷されて行くが如く、どうやら自分は車椅子に座らされて誰かに運ばれているようだった。

続いて取り戻したのは、嗅覚。

嗅ぎ取ったのは乾いた冬の匂い。

鼻腔を通り抜けた後に全身を駆け巡っていくような、冷え切った冬の匂い。

程なく取り戻したのは、聴覚。

「近衛、起きたのかッ!？」

聞き慣れない慌てた口調の声で名前を呼ばれ、未だ休眠状態となっていた筈の耳朵を叩き起こされた。

時を同じくして身体を揺れ動かしていた振動がピタリと止まり、代わりに誰かの気配を前方に感じられるようになった。

最後に取り戻したのは、視覚。

鉛のように重たくなった瞼を見開けば、そこに居たのは憔悴の表情を浮かべた見覚えの有る人物で。

「おはよう……衛宮」

俺と視線を合わせるように両膝を地面に着け、不安げな面持ちで此方を見詰めてくる彼女に俺は間抜けた返事を返していた。

場違いな返答を耳にして彼女は此方の正気を疑ったのか、拳を目前に突き出してきて開けた分の指の数を数えるように言ってきた。

その問題に滞りなく答えてやると彼女の強張っていた表情は次第に緩んでいき、最後には安堵の溜め息を吐くという結果に終わり。

「本当に大丈夫なのか？」

温厚そうな性格が窺える優しいな双眸から今にも涙を零しそうになっている彼女に問われ、俺はコクリと首を縦に振って頷いてみせた。先刻まで感じていた吐き気と頭痛は何かの悪夢だったかのように収まり、霧が拡がっていた頭の中はスッキリと澄み渡っている。

不安げに何度も同じ質問ばかりを繰り返してくる彼女を余所に、俺は視線を落として自らの左手を眺めた。

力を込めて拳を握り締め、そして開ける。

再び念のため同じ行動を繰り返してみるが、左手は正常に動いている。

問題も後遺症も見つからない。

先程まで軋みを上げて動かし辛くなっていた左手も、今は何の問題も見当たらない。

どうやら呪いのような魔法の効果は既に抜け切ったようで、自らの魔法耐性の高さを自画自賛してやりたい気分だった。

自らの左手であるシアーに魔法を連発するという自傷行為にも良く似た方法で身につけた、まやかしの魔法耐性だが。

後は高濃度の魔力を全身に循環させる事によって、相手の魔法効果を打ち消すという無茶な方法も成功したようで。

身体に白が紛れ込んできたならば、黒で塗り潰してしまえばいい。

そんな短絡的な考え方だが現に成功しているのだから、誰からも文句を言われる謂れは無い。

魔法の師であるエヴァには「お前にしか出来ん芸当だな」と、半ば呆れ返ったように溜め息を着きながら評されてしまったが。

自らの左手に異常が無い事に安心して吐息を吐き出そうとした時、とある事に気が付いた。

握られていた筈の仮契約カードが手元に無い事に気が付いたのだ。

慌ててスカートやブレザーのポケットを弄るが、目当ての物は見当たらない。

身体の有りとあらゆる箇所を弄ってみたが、仮契約カードは見つからない。

心の内に蟠っていく焦燥は次第に大きくなっていき、容赦なく胸を押し潰してくる。

自分にとって仮契約カードは元居た世界と連絡を取る事が出来る可能性を持つ、最後の生命線で。

その虎の子である仮契約カードを無くしてしまった今、完全に孤立してしまった俺が正気を保っていられる筈もなく。

まさか落としかと慌てふためきながら背後を振り返り、電灯に淡く照らし出されている地面に隈なく視線を送って必死に探してはみたが、それらしき物は見当たらなかった。

「ど、どうした……近衛？」

此方の様子を窺うように名前を呼んでくる衛宮の声で若干正気に戻った俺は、機敏な動作で前を向いて口を開いた。

「カードが無いんだッ……カードが」

僅かに語気を強めて訴え掛けると衛宮は小首を傾げて虚空を見上げ

た後に、思い出したと言わんばかりにパンと手の平を打ち鳴らしてみせた。

「もしかしてカードってコレの事」

表情を輝かせながら衛宮が徐に懐から取り出した仮契約カードを目にした瞬間、腹を空かせた獰猛な獣の目前に血の滴る肉がぶら下げられた時のように。

俺は仮契約カードを目掛けて躊躇う事なく一直線に飛び掛かっていった。

「……返せッ！」

予備動作も無かった突然の行動に両膝を着いていた衛宮が避けれる筈もなく、突き飛ばされるように地面に押し倒されて成す術も無く彼女は組み伏される事となった。

「……良かったあ」

俺の口から最初に漏れたのは衛宮に対する謝罪でも弁解でもなく、仮契約カードが見つかった事による安堵の声で。

今現在、自分がどういう状況になっているかも忘れて衛宮から奪い返した仮契約カードを見詰め、真っ暗な夜空の下で心の底から喜びに打ちひしがれていた。

仮契約カードに描かれた自らの姿が瞳に映る。

純白の翼を広げて不敵に笑い、シアーを使役させているその姿を見

た途端に、空っぽになっていた心の中に安心が満ち溢れていく。

何の謂れも無く地面に組み伏せられてしまった犠牲者の事などスツカリ忘れて。

「……………あのく、近衛さん？」

ほぼ真下から誰かに恐る恐る名前を呼ばれた俺は、その声によって我に返る事が出来た。

視線を仮契約カードから徐々に下へと落としていけば、そこには苦笑いを浮かべて頬を掻いている衛宮の姿があった。

「あ、あ……………悪いッ」

跳ね上がるようにして彼女の身体が飛びのいた俺は、若干もたつきながらも車椅子に座り直す事に成功した。

ゴホンとわざとらしい咳払いをしてから、俺は未だに夜空を見上げたままの衛宮に視線を向ける。

「あ、いや……………そんな大事な物とは知らずに預かってた俺の方が……………」

むくりと上体を起こして何故か謝罪しようとする衛宮に対し、罪悪感で胸の内が一杯になっていた俺は平謝りをする事しか頭の中に手段が浮かんでこなかった。

「それに……………柔らか……………あ、いやッ何でもない！」

「……………」

何はともあれ突然組み伏せられたにも拘わらず、衛宮は俺の事を許してくれたようだった。

その後、若干気まずい雰囲気になりながらも再び移動を開始した俺達は、お互いに質問を交わし合う事にした。

衛宮の話によると此処は冬木市という名前の場所で、先程まで居た学校は穂群原学園というらしい。

今いる場所の地名と学校名を聞かれた衛宮は終始怪訝な表情を浮かべていたが、そんな事は無視して俺は黙考に耽っていた。

冬木市、穂群原学園。

二つとも元居た世界で耳にした事が無い名前だが、そんな場所が絶対に無いとも言えないのがもどかしい。

だがエヴァは別世界を映し出す魔法具だと言っていたので、何処かの平行世界だと考えるのが妥当だろう。

恐らく日本である場所に飛ばされたのは幸이었다が、まだ此処が日本だという確証も無い。

何かしらの魔法が言語に施されている可能性も少なからずは有る。

此処は日本ですかと衛宮に質問する訳にもいかないので、取り敢えず现阶段は恐らく日本だという解釈でいいだろう。

逆に衛宮からは「見た事が無い制服だけど何処から来たんだ？」と質問されたが、落ち着いた所で話すと話題をうやむやにして難を逃れた。

その後も他愛のない質問をお互いに繰り返し、気付けば。

「あ、いつの間にか着いてた」

そう突拍子もなく衛宮が言ったので、ふと前方に視線を向けてみると、案内された家は町外れにある武家屋敷のようである。

「此処が家なんだけど……引いたよな？」

「まあ……大きい方、だろ」

何か別の意味を孕んだ衛宮の言葉に対し、俺は素っ気なく返事をしながら目を凝らして外壁を見渡した。

ポカンと口を開けたままの間抜けな面持ちになっている衛宮を尻目に、俺は外壁から不穏な魔力の流れを感じ取っていた。

簡易的な物ではあるが、どうやら結界が施されているらしい。

まさか衛宮が罫を仕掛けているとは思えないが、警戒しておいて損は無いだろう。

「もしかしてさ……何となく感じてたんだけど、近衛って何処かのお嬢様だったりする？」

「……まあ」

お嬢様という単語を耳にして懐かしくも若干癪しやくに障った俺は、ぶっきらぼうな口調で衛宮に返答し、諦観したように吐息を吐いた。

「……山を一つか二つ切り開いたぐらいの広さの家に住んでたから、引いたりはしないな」

俺は独り言のように呟きながら、京都にある実家を頭の中で思い浮かべていた。

今、皆はどうしているだろうか？

騒ぎになってはいないだろうか？

その時、ふと気付けば衛宮が溜め息を着いていたので訳を訊ねると、少しでも自慢げに話した俺が恥ずかしいと言って苦笑いを浮かべている。

「ま……まあ兎に角、中に入ろう」

仕切り直すようにそう言った衛宮は門の鍵を開けて中に入るよう促してきたので、遠慮する事なく先に門を潜らせてもらった。

辺りを満遍なく見渡してみたが、庭には土蔵のような物が有るだけで目立った物はなく、家の中に人の気配を感じる事もなかった。

流れるように玄関前まで案内されて玄関の中に入り、電灯を点けた所で互いの今現在の姿を改めて目にしたのだが。

「……うわぁ」「」

お互い血で汚れた状態になっており、見るに見れない姿になっていた。

このまま立ち止まっている訳にもいかないので、俺は車椅子から降りて廊下の床に腰を下ろし、黒の革靴を脱いで一息を着く。

衛宮に車椅子のまま上がっていいと言われたが、流石に初めて来た家を車椅子の車輪で汚す訳にもいかないので、その提案を俺は丁重に断った。

すると、衛宮は申し訳なさそうにその場で立ち止まってしまったので何とか元気づけようと、汗も掻いたし一緒に風呂でも入るかと言談のつもりで言ったのだが。

「なッ、何言つて……いや、えっ？」

これでもかと言つぐらいに顔を真っ赤に紅潮させて、しどろもどろな返事を繰り返している衛宮の新鮮な反応を見た俺の心には、じわじわと少しずつ悪戯心が芽生え始めていく。

何せ俺は木乃香やクラスメイト達に弄ばれるばかりで、誰かに悪戯した事など一度も無く。

その反動なのか、心の底から沸き上がってきた甘美な悪の感情は留まる所を知らなかった。

「どうした、俺と風呂に入るのが嫌か？」

顔の前で慌ただしく両手を振って立ち竦んでいる衛宮に四つん這い

のまま俺は近寄り、赤面している彼女の制服の長ズボンを掴んで上目遣いを送ってみせた。

正直自分で言っていて少し恥ずかしかったが、衛宮の反応が可愛かったので悪戯を続けてみる事にする。

「い、嫌じゃないけど、それはマズい」

とうとう衛宮は瞳を閉じてしまい、虚空を見上げて何かを堪えているようだったが、俺が追撃の手を緩める事は無かった。

「……駄目、か？」

少しやり過ぎかとも思ったが、猫撫で声で懇願しながら衛宮の強張った太股を優しく撫でてやる。

すると衛宮は頭から湯気を立てながら壊れてしまった機械のようにかぶりを振って何か譎言を呟いている。

こんな幸せな気持ちで誰かに悪戯するなんて初めだった俺は、もう何も恐なくなってしまう。

「……女同士なの？」

本当に入る事になれば立場が逆転しそうだが、と心の中で苦笑いしながら衛宮の顔を見上げ、悪戯を愉しんでいたのだが。

俺の発言の何かが引っかけたのか、衛宮はピタリと動きを止めて真顔に戻ってしまった。

「今、何て……?」

「いや……女同士だろって」

ふとした拍子に怪訝な口調で訊ねてきた衛宮に調子を崩されながらも、先程呟いた言葉を再び答えてやる。

「……えっ?」

「えっ……?」

しかし、衛宮は信じられないといった表情で硬直してしまい、それを見た俺も同じように言葉を失ってしまった。

暫しの沈黙の後、微妙な空気が立ち込め始めてきた所で衛宮が再起動したかのように恐る恐る口を開いた。

「え……いや俺は男だぞ?」

「えっ」

「……えっ?」

お互い何か致命的な勘違いをしているようで、何かが決定的に噛み合わない。

今からサッカーの試合をするのにバットとグローブを持った選手が整列しているかのような、決定的な違和感を感じる。

「いや、衛宮は女だろ……胸も若干有るしさ……」

失礼な事を言っているのは自分でも分かっていたが、こんなモヤモヤした気持ちが胸に蟠ったままになるほうが嫌だった俺は、有るとも言えないが無いとも言切れない彼女の胸の膨らみを指差して、真実を突き付けるように俺は衛宮に言っただけだった。

だが、まだ今の本人は理解出来ないようである。

「……………」

素っ頓狂な声を上げて後、ようやく自らの胸の辺りを見下ろした衛宮はカツと目を見開いたかと思えば、唇をわなわなと震わせ始めた。

「え……………えっ？」

自らの胸を両手で鷲掴みにして少し弄った後、再び衛宮は石像のように硬直してしまう。

まさかとは思いつつも俺が沈黙している彼女を見守っていると、衛宮は突如として走り出してしまった。

バタバタと足音を響かせながら廊下を駆けて何処かの部屋に入ってしまった衛宮を追い掛ける為、ふらつきながらも立ち上がった俺は、ゆっくりと壁伝い歩を進めていき。

そして、行き着く先には。

「な、な……………」

そこには洗面台の鏡の前に立って自分自身と見詰め合い、呆然と立

ち尽くしている衛宮の姿があった。

まるで自分の顔に仮面が付いているのではないかと疑っているかの
ように、頻りに顔を抓ったり触れてみたりを衛宮は繰り返している。

「……………なんじゃこりゃあああッ！」

最終的には彼女の悲痛な叫びが、静寂に包まれていた武家屋敷の中
に響き渡る事となった。

第三話（後書き）

えー、唐突ですが……この小説のタイトルを募集します（苦笑）

正直に言ってこのままでも良いのですが、少し味気無いかな……とも思っています。

……とある駄文小説の外伝ですので、初見の方が新しいFate小説だと勘違いなさらないようなタイトルを希望しています（汗）

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9322z/>

魔法先生ネギま！～時をとめる少女～外伝(仮)

2011年12月29日02時51分発行